十年のあゆみ

新年の抱負

安藤寿美江

戦後、幼児教育の基準である「保育要領」が実施され、幼稚園が学校体系に位置づけられてから、すでに満十年の歳月が流れました。十年を一区切りとすれば、今年は戦後の幼児教育の第二次段階にはいる発展の年であります。

ふりかえってみますとこの十年間、幼児教育界は、カリキュラム構成の問題を皮切りに、保育形態、環境構成の問題、創造的表現活動に関する指導の問題、さては視聴覚教育、道徳教育などと、実に目まぐるしく次々と重要な問題が展開され、研究されてまいりました。

そしてこの間の胎動がみのり、昨三十一年には、「保育要領」のからをぬけ出して、新しく「幼稚園教育要領」が生まれました。

まことに、この第一次段階の十年間は、幼児教育界にとって一大躍進の時期でありました。

もちろん、心理学・教育学・芸術など各分野の専門の先生がたの熱心な御研究、御指導、現場の先生がたの子どもへの深い愛情と体当り的な実験研究、またこれらによって啓蒙された父母の理解や協力の賜物であることはいうまでもありません。

◇

カリキュラムについては、大単元・小単元・風呂敷単元などの可否を問題にした初期の段階から、年ごとに研究が進められて、幼児の発達にそくし具体的目標を分析的に検討したもの、綿密な観察記録にもとづいて作成しようとしたもの、指導を中心とした領域別のもの、あるいは、とくに集団生活に対する発達を軸としたものなど、実に多面的に研究され、実施されてまいりました。

今後は、外国のほんやくや、学者の研究に仰いだ幼児の発達段階を、現場の教師の観察、実験を通して把握した実態によって、いっそう具体化して、カリキュラム作成の手がかりに役立てるよう進めたいものです。

また、こうした研究によって、一般的なカリキュラムから地域のカリキュラムへ、そして各園のカリキュラムへと掘り下げられ、独自性が発揮されてくることと思われます。これは結局、カリキュラムの理想である個々の幼児のカリキュラムに次第に接近することで、いっそう幼児にぴったりした教育的なものへの望ましい発展であります。

◇

戦後の百八十度の転換は、幼稚園教育にもいろいろの面にあらわ

れましたが、指導の面では、創造的表現力を伸ばすことに問題が多かったようです。

かって、自分たちのうけたことのない教育ですので、教師の最も困ったのがこれでした。

従来の観念では、教育はつぎこむことであり、とくに創作などということは、その道の専門教育、専門技術を指導され、その基礎訓練をうけた人でなければできないことだと思いこんでいた人が大部分であったようです。

したがって、創造的表現力を伸ばすということは、幼児の感じたこと、考えたことなど、つまり内にあるものを引き出して、色に、形に、声に、動きに素直に表現させることであると理論の上では理解されても、その実際指導はとかく敬遠されていたようです。

絵画や製作の面では、ぬりえや、既成の材料を組立てるような指導だけでは創造性を育てることのできないことは容易に理解され、割合早くから自由に絵をかいたり、いろいろな材料ですきなものを作ったりする指導が、あまり問題なく進められたように思われます。

ところが、身体の創造的表現には、従来の単なる模倣表現が多く、思いきってこうした指導にとび込むには、相当の勇気と工夫が必要だったようです。

指導のねらいを達するためには、先ずその面の幼児の発達段階をつかむことが先決問題でしょう。

第二に、表現活動には先生と幼児、あるいは幼児同志の間に、自由に話し合え、自由にふるまえる人間関係が重要な要素です。お互いの間に抵抗があっては、伸び伸びした表現は生まれません。

第三に、経験を豊かにさせることです。からのびんをさかさにしても何も出てはきません。幼児は動物園に遠足すれば、だまっていても象や熊になってはいまわります。園生活の中で共通の経験をじゅうぶん楽しませ、自然に表現活動に導きたいものです。

第四に、環境に大きな役割があります。例えば、交通整理台やシグナルがあれば、のりものあそびは自然に誘導され、楽しく展開することでしょう。しかし、何といっても環境で大きな力となるものは教師自身です。教師の創意ある生活態度は、やがて幼児の創造力の源泉となるでしょう。

始めは戸惑った創造的な表現活動の指導も、次第にこれらのつぼが押えられ、楽しく効果的な指導がおこなわれるようになってきました。これは指導の面の大きな進歩の一端です。

◇

カリキュラムに関連し、もう一つ、是非発展させ、研究を進めていきたい面があります。

それは、幼稚園と小学校との関連、つまり幼・小教育の一貫性であります。

これはすでに「保育要領」にもうかがわれ、「幼稚園教育要領」にももちろんとりあげられていることで、今更こと新しい問題ではありません。また幼稚園・保育所・小学校低学年を一連とした「幼年教育」としても、数年来叫びつづけられ、この方面の研究会もたびたび開催されてきました。

ところが、かけ声の大きさにくらべ、実際の伴なわないのが現状であります。例えば、幼稚園で、小学校三年生で指導するような水栽培の観察記録をとらせたり、小学校の二年生が、幼稚園の四才児でもらくにきわけられる程度の、リズム楽器の音あてあそびの指導をしたりしているのは、その一例であります。また、幼稚園では大きな紙にのびのびと絵の具でかいていた子どもが入学すると、急にその四分の一くらいの小さな紙に堅いクレヨンでかくという現状で、とにかく小学校と幼稚園の教育には、いろいろな面でくいちがいや、断層があります。

そのため、ややもすると、幼稚園側では、せっかく丹精した芽が

小学校へ行くといじけてしまうと不満に思い、小学校側では、幼稚園からきた子どもは集団ずれがしていて扱いにくいと不平を持って、互いに感情に走り、意志の流通の欠けるのは、まことに残念なことであります。

事情がゆるせば、幼稚園の教師がそのまま小学校にもちあがり、小学校低学年の担任が幼稚園の教師となるように人事の交流がおこなわれることにより、この問題は自然に解決されるでしょう。しかし、現状では相互に教育の実状を理解し合うよう方法を講じていくことが目下の急務です。少なくとも、幼稚園の先生は小学校の一・二年を、低学年の先生は幼稚園の四・五才児の実態をしる必要があります。

最近地区的には、園長・校長が中心となり、この方面の研究に先鞭をつけて、お互いに実際指導を参観し合い、合同の研究会をたびたび持っているところのあることは、この時期の子どもの幸せをねがう教育者の熱意のあらわれとうれしく思います。

今年はこの種の活動がますますさかんになり、地区的にも回数多くおこなわれると同時に、全国的にも拡がっていくよう願ってやみません。

新年を迎えて想うこと

新年の抱負

山村きよ

新年を迎えてこと新しく決意をかためることもないけれど、編集部からの御依頼をうけたのを機会に日頃心の底にうずいていることを思いのままにのべてみよう。

「過去の経験を通して若い人たちと語り合いたい」

三十六年もの間、幼児教育一すじに思いを貫いてきた私には失敗のこと、成功のこと、いろいろと想い出されて時には自分の夢に酔う時もある。十年一昔というけれどほんとに十年間ごとに幼児教育の方向も社会のうごきとともに前進しながらまわっている。しかも時には逆もどりするのではないかということさえ感じることもある。

大正時代に始めて保育の方法を知り、「よい先生になろう」と決意して一斉保育の上手なこつをおぼえてからお茶の水女高師保育実習科に学んだ私は、一斉保育の形態からぬけ出ることに非常に骨を折った。

昭和の初期から戦争前まで自由保育（誘導保育）ととりくんでいつも熱心な先生方から問題視され通しながらも、一応の落ちつきを見て昭和十年頃からの一昔は実に充実した楽しい幼稚園生活を送った。

戦後は姿こそ変ったけれどもり上った自由の流れ、保育に意気揚